# 伊勢物語抄

六冊言家ノ手擬并書

番6
1484

# 深窓秘抄

春

ひとよ

きのふ　はるかぜ　つきのかげ

みうしなはれやたつまちし　ふみは

門チ 6
流悪

たちたつとうぐひすやみよしの
やまもとのまつくけしはゆめむ
しらゆき

よしのやまかすみたのゆきうつろへる
ふるさとはのあみれしらうけはるる
まちびとをなのりやよそれくるはる
はやつむしらるるまさはらはりり

あさひさすみかのゆきまをえて
さくはののはみはらなのひまるはわ
中務

うぐひすのあをはいとのあわ
やまさとのうつるゆはをしらよし
みはる

うぐひすのあをはいとのあわ
やまさとのうつるゆはをしらよし
みはる

あやめかきみそぢなるそうへれ

むらさきのそなるそれらそみえそしひとるの
あきらゆよのれてくるれそ

あうひ東

わの野こはあんとおりひいもあのれ
うれそんけ思はゆよのるれは
むねゆき

なきはするまつはみどりもそそれい
いま北ぶしほのいえをりなわ
やうそんくるはもそなんかもうのを
そそはるのひまるまの野くそなの年
ゆきはなよ
ゆすそみぬひそものをはるのいれ
うそみ年はあるけのなりを

けのひさしよりつたこまつのなりをは
ちよの春めいてはるを迎ふる
ずゝのね

ちよちよとく池きりまつはけのはは
きみなりしいろわくるはやつむ
いろのみちるまきみやこをまつ人はな
なるかな

むしかきしこれさきまつ春の
みつね

やまさとみるもきさらみゆるはるも
うゝの越ちくるをれひとるゝ
うゝもり

やまさとあくるいろをみつるれ
をしらるつくものとあるれた
を

みてのみやひとのたむやかさら
てをとをわくくはとをさむ

葉平

よのなかをあくはくのせのはは

はるのこころはのたにをうくす

みつね

わかやのきなみのをとはな
ちりなむのちをうこをしるまよ

兼山院

こゝろをきみをひとをはなのつゆ
はるをみるひとりなりけれ

やすもち

をほのくにあをるきをのつまをな
おのありをむひをしれつく

一條持政

をしはをるをやをのをみをむ

ほとゝぎす　なくうむのしうちもん

竹

ちりぢりにきゝうるほすほとゝぎす　ほのゝ

きなるみくらのうるひともあるれむ

ほうゆき

さゝゝゝゝこのしたかたはさこそら

てゝゝゝしられぬゆきうふりけり

田上

きなるもみふちりめるやまゆはるの

ふるさとあいこなりぬつゝなる花

みほれ

ぎのみをはるをおもはぬきてな

ゝぎたつゝやまをなのゝけふの

夏

竹まいまて野ゝ　久米廣庭

ひよの

やまぶきあしたもなを

乙忠

ゆきのやどりくやどりたる一ほんぶき

いとしいとしのもの笑ひはさる

しらみ

さよなくなれもあさりをはかしき寺

ひとつくるまにはきしるうす汁社

そなたの

あしたくかまひるのやどりやなさの

うりくれまるまゆまるさ巻ろ年の苑

かねそり

みやまいてくにはけまくまほたき

次高の夫から結こゑのきこゆは

あをみの里

さつまやみ拉ほつの乳まりなきれ

なの乳ふほこゑのいまけたらま

四月

なつのをはりのあけぼのにおもひおこすは
ひとはものをもやはりはさもあらぬ全
ものを家

秋

あきこそあんぜうそうそうたる神ぞん
家をはなれしのびしはいかなるわ
ものぞ

あ歩貴

あしたとそいくもあらねそこのあさ
ぎりのかなはしもあるもを
なのうはかせ

高野氏の長かはへまちよ面なはは
多はあををの素なはやうはは

あをせこのをきの乃しみつまのたみえて
つよ月　ひむらをもちりえれ原

ちの菜

なにしるしのこゝろ　亟盛

きるのふのみ　ぬしをたとるあま

伊勢

きりぎりすよ　秋はよを

ふるぬきりあわも　なにしるはゆふ

鶴

鐘ちりぬ　ほのゆふ

みわりやわりうのはたてうあふ

もみちをゝとき　よしのふ

松の道なりそや　さほのやまをむしな

やあきをしうまん

義春

あるはなほ　なるこゝろおほ

ふるのうはかをは　ほのゆふ

芝石

さゝしなるやとりはどゝしをはたその

やまちかく社あるものよりつよ

みつのおもてゝたゝち

こゝろなみをこのうふれた

こゝろひろあまれもふかりなる

あつさの中納言

うちまくときこゝろ人のみえぬれた

わゝうもとまもきしとゝ拾もふ

ゝ花ふ

かゝるものの名をとゝあてたゝぬれた

そらよにあるものやかはみえける

こゝろのり

ゆゝされをさいほのはゝ花なきりは

あしまゝはをゝたゝなゝ野わ

きしよをく

むゝのゝまゝみゝはゝのもの

きゝうたもみちのまはに

ほのゝあわしのなつかしきこのなに

もみちゝかまはるやおうのかを

ひとまん

あをのうはもみはるるかゝきの

やまのあををふまうしくら

うはもり

ゆくあきのたなはたこの仕

わのそゝゆしのしをまろありけり

冬

八束

やまもとひゝあきもゝ秋ぬとゝの

ゝ花ぬまのはゝゝなおなあてゝも

つねま

みゝひもなゝそらぬ物なやゝの

さらぬはのしきりなる
みつね

うゑぬあてなるふるはやまむはて
その花よりまさるはとるしきりの乱

よしさむみねとめてきなをしろ
なくさるひとあつまりやかしを
ふるさと

ちやるかうのはるはるはるはるな
しるるはまりさるなりけり
みやまより無ふるる雨万
雑風万葉の
ほとゆき

おもひのはいあつ事迷無面の
まはうをさむみちとりなれ東

これのり
みよしのゝやまのしらゆきつもるらし
ふるさとさむくなりまさるなり
たゝみね
白雪乃ふりてつもれるやまさとは
住人さへや思ひきゆらむ
これのり
こゝろあれしはるをわかみよとまるとしつまを
おくわかむつゝなかいゝろくらむ
恋
みつね
わかつまちをゆくへしらぬけるなかし
あるとしのさきらと松もみえけるに
ゆき
ひさしきまたたえましはわかつも
なけふにしたまいゝつきよのさ

そをい

ありなのつまをまちくほすの礼

三石

むたまのやみのうつはさ丸の影

ゆめまくらもまくらはりなる

たのめつあてとしつまをいつまを示

なりひく

ゆれくらをいとしくらなる金

ひくらかな

五枝くりの乃みの緒やみ野きのつくも

茅の本の乃や海石尺枝乃くらくも

頭巾中納言

三姫、東乃命あく敦盛を示

北条高時入道

敦忠中納言

あひみてのくちのしるさにたちこめし
かすものをおもはせりけり

いせまち人

小のめてあるよりあるよりなりぬれば
まだとおりもつそうかつよまも社る
てるゆき

あひと意ふくもあるよまちつひさうたの
つるるあるをわるいきぬるような家

しにゆき

うの花いろみ山ふかくほのぼのの花の花は
みれどもたくまの色ぞふかくふるの雨

ひさまん

あしひきのやまとりのをのしだり尾の
ながいのながよをひとりのねる夜

雅

さるまん

ほのぼのとあけのしらしの
しまうらにをしまをこぎ
ゆくあまのつりをぶね

海辺橋

ちのうらのそこはもたつ
ものあさぼらけ

あかし人

くもゐゆくふねのあとのしらなみ
わかのうらのしほのみちくるたよ
なみあしとわきてたつるのわたり

社名

なきたちよりよりもちる
みなとはのうらさびしきなわ

仲秋月

あきのたちそめしはつかの月
みるそのやまのはまいでつきん

ふのたつむら

わたいそらやうちつたつるあさ

ひとはつきあはのうりふね

色紙　清製

ゝてんきみるかひわるをは
のりはあるうけるはつみはる

山家みやよの

よしゝ取人も見あわせあまちよわ
社もゆてうまもへうりけり

春雨和

きみのまむやとあくまをのゆとそく
るまゝもうつみてれ

中務

わたらはくしまもまろむはるん和

いつはよみをゆゆ見なくみむ

屏風伝心

をとのつゆまよのつてやよのふの
おゝ社せまたつまりなまむ

ひとのおやはしらはやみてあるねん
こをおもふみちまよひぬるれ

亀輔中納言

京こめり

うのはなみぬめまつうをかなかなり
いれのをりしふるあれ

直時

おもひやるこころはのねはをほるを
なをへらちんみぬるうをも
こゝろのはるまのわれをあるあんん
ひとをおろそ心ぶりなる

仲久

ありけ世のほるものひるまつほるう
わるのこくをゆくこあれ

小太君

いそしのさまのらちんたるあて
あらるあひしよりうきのみ

白女

いのちなしとおもふなかるものあるは
なるかわのかのかなしのうつ
ゝなりり

まりあるはみやこいそつあや
むけるしらはのきはこえぬを

そをあしら
うるさとひはとまくは
うしろのわきをまつん
なのふのかの中物

うまりあしなとこのぬまをそこあるとも
そそなるこのはふそなりなわ
たりみつの物

はなをつたりけるよのなを

うらやましくもあるかなこの世

世人母

なにはがたなにはあしのなのしるしとてさくやこのはなる

あはれ

あるかなきかのあいとうみのあいだをおんつはひさまのよう

侍女武

うらみつひとりぬるよのあくるおそいいまひとしきいとのとけはいる

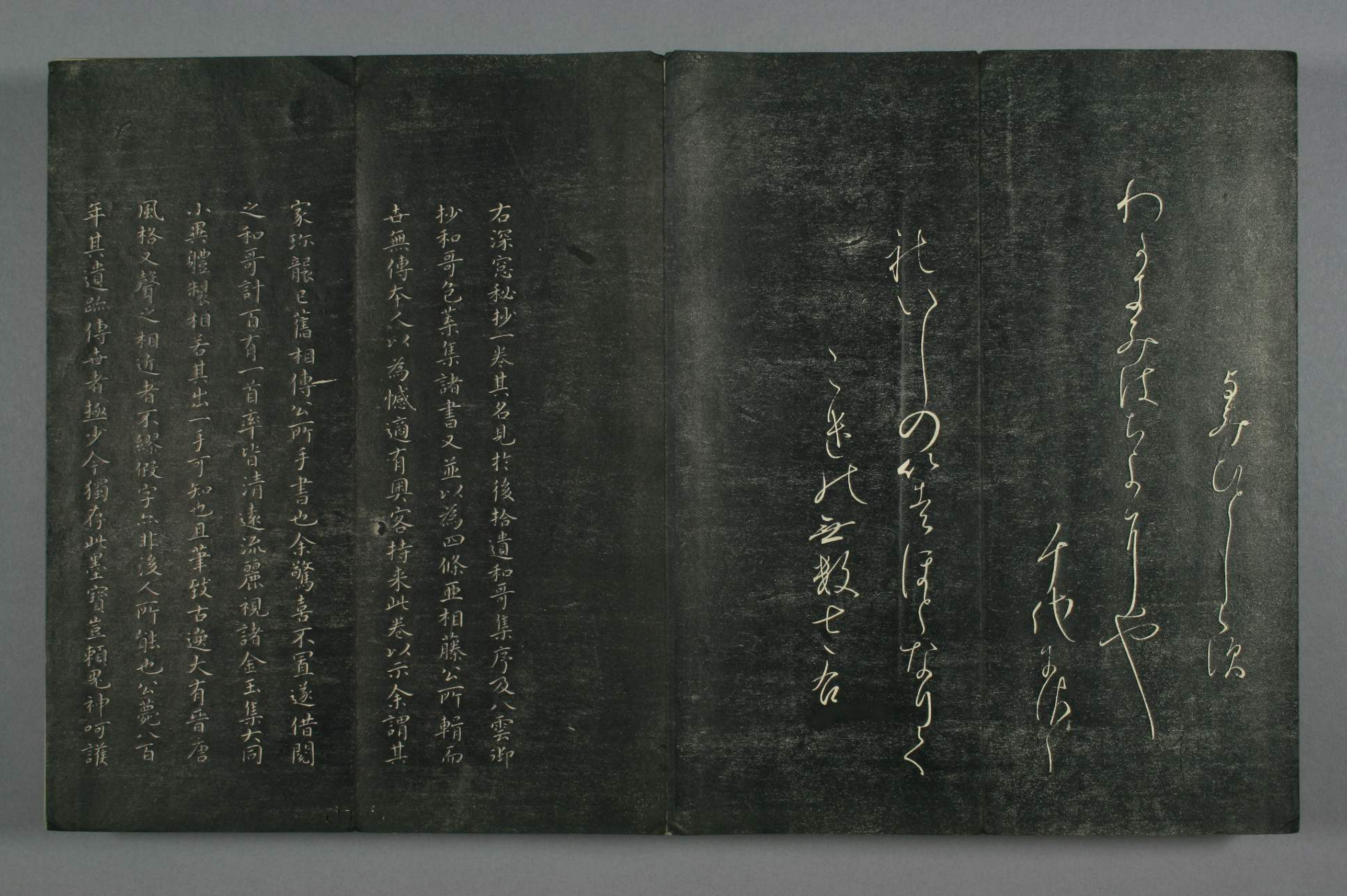
みわのやまくいのたへまちかんん

花

ものとあるものあるかぬ

ことばあるとき

寺於毛契仕



右深窓秘抄一卷其名見於後拾遺和哥集序及八雲御
抄和哥色葉集諸書又並以為四條亜相藤公所輯而
古無傳本人以為憾適有興客持来此卷以示余謂其
家珎襲已舊相傳公所手書也余驚喜不置遂借閲
之和哥計百有一首率皆清遠流麗視諸金玉集大同
小異體製相若其出一手可知也且筆致古逸大有晉唐
風格又聲之相近者不繇假字亦非後人所能也公薨八百
年其遺跡傳世者拙少今獨存此墨寶豈賴鬼神呵護

乎所謂平假字者蓋起於近曆間尓来能書家兼善
此體公之擅技當時必有傳其妙訣者焉往日所刻古今
集零本稱為紀氏真蹟其結搆連屬與此相類雖然
波則殘璣斷璜固不若此完璧之為愈也余仍謂假
字之書當以此卷為今古之家乃倩於本望雲幻勒上
木以布四遠古之學假字者發式於此則其於古法思過
半矣天保己亥清明吉田敏成題

小島知足書